死者からの挑戦状

鳥之巣軍師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死者からの挑戦状

【Ｎコード】
Ｎ２３２７Ｎ

【作者名】
鳥之巣軍師

【あらすじ】
閑静な住宅街で火事が起きた。
火事が起きただけならば、良かったのに。
頑張って二度目の推理小説作品。

プロローグ

「火事か・・・。」

焼け焦げた一軒家の跡地。
警察と、消防がいる。
消防はやっと火を消し終わり、出火原因を調査している。
我々、警察だって協力調査と、犯人への手掛かりを探す。

この一軒家の火事での死亡者は、1名だけ。
まだ、高校生の少年である。
親は、仕事で居なかったらしい。

今の所、考えられるのは、
・火使用時に誤って火事
・放火
・故意の放火　↑家族含む
である。

福岡県の静かな住宅街。
ここで、火事は起こった。

何があったかは分からないが、火事によって命が消えたと言うのは、
悲しむべき事である。
親は、普通涙を流すのだろうが、黒く焼け焦げた遺体を未だに見て
いない両親は、涙すら流せずにいた。

「原因が分からないので、少年の遺体を鑑識にまわしときました。」
「それは良いんだけど。両親を連れてってあげて。」

「はい。失礼します。」

火事が起こっただけならば、鑑識の技術を持ってすれば原因究明が出来る。
原因究明が出来れば、犯人を捕まえる証拠が出来る。

現場保存と言うが、鑑識が見る前に現場を荒らさないこと。
これは大切だと、火災現場で痛感していた。
と言うのも、現場保存が出来ずに、犯人が逮捕できなかった事件が多々あるからである。
そんな事件に関わってきた自分だからこそ、痛感できる事なのだと思った。

挑戦状？

「鑑識から、連絡です。」
「死因か？」
静かだった刑事課の部屋の空気が動き出す。

「えーっと。背中に刺されたナイフによる出血多量が死因だそうです。」
「ん？火事は？」
「ガソリンに点火したことによる火災だったと思われます。」

ガソリンに火がつけられる前に、死んでいたと言う事は、完全に他殺ではないだろうか。
その後、偽装工作の為に火を付けたと考えるのが妥当だろう。

今回の事件は、福岡県警中央警察署の管轄で起きた。
しかも、警固交番付近で起きたために、犯人逮捕は急がなくてはならないだろう。
市立警固小学校からすぐの距離にあり、国体道路と大正通りの側である。
だから、中央警察署刑事課では、特捜部（特別捜査本部）が設置された。

けれども、犯人に繋がる証拠がない。
地取り（周辺の聞き込み）をやらなければいけないだろう。
面倒だ。証拠が挙がらなければ、犯人は逮捕できず、警察の信用とやらが地に落ちる。
４年程前に、「許されざる者」と言うビデオを出した時も、「警察はバカか？」と叩かれた。ただ、暴力団の危険性を伝えたかっただ

けだと言うのに。
その暴力団の危険性と言うのを伝えるだけで大変なのである。
どうせなら、「静かなるドン」でも再放送にすれば良かったのでは無いかと弱気な意見を述べる警官も少なくはない。
と言うより、暴力団数日本一を誇る福岡だからこそ出来たことではないかと思う。
誇れるべき事でもないのだが。
さらに、警察官と言うのも、怠慢な奴らが多い気がする。いわゆる点数稼ぎと言う奴だ。
いくら点数を稼いだ所で、昇級試験に受からなければ意味が無い。
時に厳しく、時に優しくが基本だと思う。

おっと、考えに熱中しすぎた。
「警部補。どうでしょうか？」
「うーん。」
聞いてなかったとは言えまい。
「ま、地取りをやってください。事件現場周囲のハコ（交番）だけでなく、中央署の全交番のアヒル（制服警官）を数人特捜部に臨時移動させて人数確保も行ってください。以上。」
「分かりました。以上で特捜部の捜査会議を終わります。起立！敬礼！」
皆が、斜め４５度におじぎする敬礼を行い、部屋から出て行く。
警部補である私は、警部と共に出て行く。

特捜部の総指揮である、警部に続き副総指揮である私、警部補その他、捜査員が４０名近くと言った所である。普通ぐらいだろうと思う。

あとは、再び捜査会議に於いて、事件が進展するかしないかである。

挑戦状？

特捜部の会議は、毎日行う事になった。
みんなが、捜査報告をまとめ、捜査に関しての最新情報を手に入れる為である。

広い部屋なので、マイクを使う。
「特捜部捜査員の皆さん、こんにちは。この特捜部の捜査主任になった木山大介（きやまだいすけ）です。では、捜査内容について、昨日から今日に掛けての結果を発表します。」
マイクが手渡される。
「はい。主任補佐の大木浩介（おおきこうすけ）です。では、報告内容をまとめたので、手元の資料を見てください。」

「最初に、害者の家族と、近隣住民に地取り（周辺の聞き込み）をした結果ですが、不自然な証言はないです。また、殺害する動機もないです。
次に、害者の友人関係を調べましたが、仲は良好でした。
さらに、学校での生活態度を調べましたが、これが一番問題でした。素行はまじめなのですが、それが逆手に出て虐められていたようです。ただ、虐められている生徒が死んだ場合、自殺の線になります。本件は、自殺ではなく他殺なので、虐めの中で何かがあったと考えるしか出来ません。以上です。」

特捜本部。それは、空気が重くなるような事件を扱う刑事課が事件の際に捜査員を収集する為の、名目である。

今、ここ福岡県警中央警察署では、一昨日起きた、放火殺人事件を調査している。

情報は以下の通り。
・被害者は、素行良好の一般生徒である。ただし、虐められていたらしい。
・被害者の死因は、後背部をナイフで刺された事による出血多量であると見られる。
・また、被疑者（犯人）は、被害者を殺害した後、ガソリンを使った放火を行っている。
以上である。

家が燃えた。
子供が死んだ。
まだ、夢を見れる世代なのに。
犯人を逮捕して欲しい。
処刑して欲しい。
願いはそれだけ。
木村夫妻は、この事件の被害者の両親である。

なんで、我が子が？
養子だから？
そんな理由は要らないだろう。我が子のように愛したのだから。
死ぬ必要なんて無かったのに。

「ん？」

ハンドバックから、紙が出ている。
コピー用紙である。

文字が印刷されている。

あぁ、これは、子供がくれた詩だ。
一所懸命に考えてくれた詩だ。
読みながら涙が出てくる。
止まらない。もう、止める必要もない。

タイトル：帰りたい　作詩・木村隆（きむらたかし）

帰りたい
帰りたい
あなたが笑う
その場所に

帰ろうよ
帰ろうよ
あなたが笑う
その場所に

私は今でも感謝する
あなたの子供に生まれた事を

私は今でも感謝する
あなたと一緒に笑えることを

お父さんとお母さん
感謝するのは親だから
そんな理屈は要らないよね

血の繋がりなんて要らないよね

私は暗い部屋にいる
じわりじわりと

悲しみが恐怖と
共に現れて
あなたの元から連れていく

嫌だよ
独りぼっちは嫌いだよ

私はあなたと笑いたい
あなたがいくら遠くに居ても
あなたがどんなに離れていても

私はあなたと生きてこれて良かったよ
有り難う
お母さん

「これって。」
「これは・・・。母の日にくれた詩なの。」
「そうなのか。・・・これって、今日来た警官が言ってた、虐められてた事が関係してる気がする。帰りたいってタイトルからして。」
「え、まさか、気付いて欲しかったのかな。気付いてあげられなかった・・・」

その日の夕方、２つの人影が寄り添うように、悲しみの背中を夕日に向けて歩いていた。

挑戦状？

福岡県警中央警察署刑事一課。
強盗、殺人等を捜査する刑事と呼ばれる警察官の集まりである。
鑑識と消防が出す調査結果によって捜査内容は大幅に変わるだろう。

「福岡県警中央警察署の者です。」
「何でしょうか？」
ここは、とあるインターネットカフェである。
同級生がよくここで遊んでいた被害者を見たと言う証言と、そのＩＤを知る同級生の証言により、ここを調査することになった。
「えーっと。そのＩＤの方は、４３番の席です。」
「席はＩＤで決まってるんですかね？」
「はい。」
「最後に来た日は？」
「事件前日ですかね。」
と言う事は、何か残されている可能性がある。

「先輩。凄いですね。ここって、ＩＤで席を決めるんですね。」
「それだけ会員が少ないって事だろ。」
「なるほど。」

４３番の席についた。

「特捜部に至急報を入れてくれ。」
「はい。何と送れば？」
「あぁ、お前、至急報入れた事無いな？」

「はい。すいません。」
「じゃ、ここにいろ。４３番の席に誰も入れるなよ。」
「はい。」

至急報とは、特別捜査本部（特捜部）に緊急に入れる無線である。警察無線は、ＡＰＲ型無線である。
１９８４年に起きた「自民党本部放火事件」「グリコ森永事件」でそれぞれの事件の犯人が当時アナログだった警察無線を妨害したと言う関係から、１９８５年からデジタル方式を採用している。その為、一般的に傍受は不可能になった。

「至急、至急。至急、至急。こちら、中央０１　中央０１　本部どうぞ。」
「こちら中央本部。どうぞ。」
「丸害（被害者）は、事件前日、ネットカフェに居たそうです。サイバー（サイバー警察）の技術班から1人こちらにください。どうぞ。」
「本部、了解。」
「至急報、終わり。」

「先輩。終わりましたか？」
「おう。お前も、至急報ぐらい出来るようになれってか普通出来るだろ。」
「・・・。」
「お前、面倒だから押しつけたな。」
嫌な後輩を持ったものである。

「お待たせしました。特捜部に招集された捜査員です。こういう者です。」
名刺を見る。

「山本五郎さんですか。」
「嫌だなー。佐々木巡査部長。私は、山本巡査です。」
「階級付けただけかよ。まぁいいや。えっとサイバー警察の方ですね。」
「はい。サイバー警察福岡本部技術班の山本です。」

「ここです。」
４３番の席。

「先輩。山本巡査はこれから何をするんですか？」
「パソコンの中身を調べるんだよ。そんぐらい解れよ。」
「佐々木巡査部長。許可取ってありますか？」
「既に。」
「解りました。」

山本五郎巡査。彼は、サイバー警察福岡本部技術班に属する警察官である。
警察官である事に変わりはないが、サイバー警察。つまり、コンピュータ関連と言うより、インターネット関連の情報捜査を得意とする所謂、公的ハッカーである。

おもむろに、自分のバックからノートパソコンを取り出し、黒い画面に白い文字で何かをやり始めるが、到底理解できない境地にある。
しかし、細かいことをいろいろ言っても無駄である。
ズラーッと表示されていく数字と文字の羅列は、まるで迷路を描いているように動く。

山本巡査の手が止まる。

と思ったら、再びキー入力を始める。

そのキー入力の早さは、目で追える物ではないだろう。
黒い画面もいつしか数が増えて、目が回りそうな世界感を描く。

ｔｅｌｎｅｔ？
何だそれは。
ｎｍａｐ？
何の地図だ？

何も解らない。
普通のノートパソコンなのに、普通じゃない中身。
これは何がどうなってるのか。

山本巡査の手が再び止まる。
「ノートパソコンと接続しました。」
「それが？」
「被害者、凄いですね。このパソコンで、他数のコンピュータに侵入している上に、携帯まで繋げてますよ。１つのネットワーク群を組み立ててます。」
「つまり、被害者が不正アクセスをしていたと？」
「はい。これ、個人的な恨みによるクラッキングですね。間違いなく不正アクセスです。」

被害者は、虐められていた。
個人的に恨みがあってもおかしくはない。
最近は、携帯によるインターネット使用も増えている。
前略プロフィールなど、いろいろある。
まさか、そういった携帯サイトを見つけて、虐める当人を攻撃していたのか。
「おい。山田！」
「何ですか先輩。」

「本部に至急報だ。被害者、不正アクセス禁止法の可能性有り。」
「はい。」

これは、新たな事件が起こっているようだ。

「巡査部長。」
「ん？」
「本件は、本当に他殺ですか。」
「それ以外にないだろう。後背部にナイフを刺している。どうしてだ？」
「それが、これを見てください。」

そこに表示されたのは、ネットに転がっている自殺サイトであった。

挑戦状？

それから数日が経ち、未だ事件は進展しない。

自殺サイトを見ていた被害者。他殺ではなく自殺なのか。
けれども、後背部に深々と突き刺さったナイフはどうなる？

あれは、いくら背中に手が届いても・・・
否、出来るのか。

けれども、真っ直ぐに突き刺せるのか。
そもそも、自殺ならば、火はどうやって点けられたのだろうか。

先にガソリンを部屋中にばらまいたとして、どうやって火を点けるのだろうか。

まさかとは思うが、被害者は実は生きているのだろうか。

死体と思われた物体は死体ではなく、死んだと思われた被害者は生きている。
では、何のために？
そもそも、虐めが苦しいから現実逃避して自殺するならば、加害者に見せつけようとする心理が働く。それを自分の家で？
と言うより、現実逃避しての自殺なら、生きている必要がないのだから、死体工作は要らない。
生きていると仮定して、被害者は何処に居ると、言うのだ。

いや、死ぬならば加害者に見せつけずに、死ぬ人もいるのか。

さらに考える。

・・・思い出した。

そうか。死んでいるのは確かである。

デスクトップにあった、・ｔｘｔのテキストファイル。

中身は、１行書かれただけの文。

その１行が、『現実に指名手配されました。私は逃げます。』

だったのである。これはつまり、現実逃避を表しているのではないだろうか。

そうすると、これは、自殺なのか。

けれど、どうやって死んだのだろう。

否、火の付け方が分からない。

科学捜査研究所に捜査依頼すべきだろうか。

もう少し、聞き込みをするべきだろうか。

「あのー、捜査方針を・・・」

「あぁ。えっと、周辺の聞き込みを続けてください。以上」

今度から、会議中に深く考え事する癖をなくす努力をしよう。

挑戦状？

自殺。それは、自分を殺すこと。
たとえ、肉体的に死ななくても、精神的に死ねば自殺だと思う。
それは、涙が流れるよりもきつい心理状態によって起こり得る。

「事件の謎が解けました！」
1人の刑事が叫ぶ。

「被害者は、自殺です。」
それは、何回も頭をよぎった答えであり、違うと思ったものである。

「簡単なトリックに、私たちは騙されたのです。」
1人で何か言っている。

「まず、家の中にガソリンを撒きます。次に、電源プラグにシャーペンの芯を挿します。
これで、トリックの完成です。
ナイフは、後背部に軽く当てた状態で、壁に押しつければ一定の強さで押されます。あとは、倒れた時に、シャーペンの芯が完全に電源プラグに挿されれば、電気が流れて引火します。」
なるほど。

科捜研に聞いてみよう。

「どうですか？一応、科捜研も同じ見解でした。」
すでに聞いていたのか。

「そうか。自殺か。」
こうして、事件は幕を閉じた。

―あれから、長い月日が流れて、すでに１０年を迎えようとしている。
私はすでに、警察官を辞めた。いや、名誉定年退職とでも言おうか。
この紙を読む人は、意味が分からないだろう。
私は、この事件の被害者の家族と、友達付き合いをしていたのだ。
だからこそ、事件の真相を探る捜査に乗り出した。

これが、一応の言い訳であることをここに記す。

では、本当の事件の真相は何か。
それは今から記す事だ。
けれども、この紙が見つかった時、私はすでにこの世にいない。
ちょっとした用で出掛けている。探さないでほしい。

さて、木村隆君は、私がもちろん知っている子供である。
学校では、虐められて居たが、それなりに生活していた。

彼の本当の父親は、一流企業の社長である。

とある事件の被害者で、既に死んでいる。
この事件については、「警視庁捜査一課」のファイルにあるだろう。

今回、本件では、誰にもその事は言っていない。
繋がりがあると思われてはいけないからだ。

と言うのも、
その社長を、狙撃した人物こそが、俺だからである。
警察の中で、ＳＡＴ狙撃班に居た事もある俺だから出来た事である。
誰も知らない。

場所は、東京だった。

そして、その子供が、本件被害者である、”木村隆”こと、”宮本隆”

彼は、どういう情報源を持っていたのか、私が犯人であることを突き止めた。
私は、バレないように監視していたのだが、バレてしまった。

知られたからには、殺すしかない。

取引をしようと誘って、俺にしか出来ないトリックを使った。
まず、普通に取引をする。
商談成立のようにして、固い握手に厚い抱擁。
抱擁した時に、背中からナイフを突き刺す。
ガソリンを撒き、一旦、中央警察署に戻るが、職務だと偽って狙撃地点に向かう。
後は、ガソリン目掛けて、狙撃するだけである。
一瞬で家を燃やせる。

後は、警察として捜査するかのように、事件現場に近づき、薬莢の回収を行えば、立派な偽装工作の完了である。

誰も知らないトリックである。

しかし、私は、ある事実を知ってしまった。
もう生きていられない。

私は、死のう。

―

「本日未明、四王寺山の山中で、男性の遺体が見つかりました。
男性は、元中央警察署の警部補でした。

名前は、大木浩介さん。」

エピローグ

さて、今回は短く簡潔に完結させました。

完結した理由は・・・。脳内小説作成部署が、機能停止をしてるからです。

パソコンを、リカバリしたり、体育祭が近づいてたり、部活の大会が近づいてたりと、忙しく、なかなかネタを考えれませんでした。

実際、今も忙しいと思います・・・。思うだけです。

えーっと。ここを最初に読む方はいらっしゃいませんよね。

今回は、前作品「日常」を巻き込みました。

こちらを読んでない方は、読んでみてください。２０話ぐらいまであったような気がします。

「日常」では、狙撃した犯人に確証はありませんでした。

今作品で、実はＳＡＴの狙撃班に所属していた経験を持つ警部補が、「日常」での狙撃を仄めかします。

ＳＡＴの狙撃班から外されたのは、相当な理由なのでしょう。

さらには、その警部補が自殺します。

つまり、挑戦状を発行し続けるのは、大木浩介警部補なのです。

さて、こんな感じの適当小説。

皆さんのご感想・ご意見をお待ちしております。

作者は、どのような意見に関しても、素直に受け入れたいと思います。

また、適当小説で良ければ、題材を貰えれば作らせて頂きます。

そして、次回小説に関してですが、やはり構想が思いついてからになります。
相当忙しいのは、前述した通りですので、執筆速度が遅くなる事をお詫び申し上げます。

最後になりましたが、この小説を最後まで読んでくれた皆さんに感謝します。

※作品中の警察関連は、事実と誤差があります。
※作品中の誤字・脱字は、教えて頂ければ訂正致します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2327n/

死者からの挑戦状

2010年10月10日10時44分発行